

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：13801

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2022～2023

課題番号：22K18467

研究課題名（和文）明治文芸から見る感性のナショナリズム サブライムな国土とピクチャレスクな風景

研究課題名（英文）The Nationalism of Sensibility from the Viewpoint of Meiji Art and Literature:
Sublime Land and Picturesque Landscape

研究代表者

森本 隆子（Morimoto, Takako）

静岡大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：50220083

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）： <サブライムな国土>を下支えする<ピクチャレスクな郷土>の解明をめぐって、明治30年代の<旅と紀行>の文学ジャンルを検討した。結果は当初の見取り図を大きく裏切るもので、国木田独歩の「小民」を始原に、終幕を柳田国男の「山人」研究に置く一連の分析からは、むしろピクチャレスクな風景に亀裂を走らせ、踏み破るようにして姿を現す、絶対的<他者>としての「民」を抽出することができた。「穢多」を描く記念碑的作品、島崎藤村『破戒』に、ラスキン経由のワーズワス再受容がもたらした「瞑想」を媒介に社会からの「放逐」を選ぶことが「sublime/picturesque」の政治的力学圏への訣別を意味する構造を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治30年代文学が描く<自然>は、古くは明治40年代に隆盛を迎える自然主義文学の前駆とみなされ、また最近の研究成果は、これをオリエンタルな植民地主義を参照枠とした<中央>に対する<周縁>として位置づけている。これに対して、本研究が導き出した、ピクチャレスク美学に拮抗するような「民」の像は、植民地主義的眼差しに回収される寸前のところで独自の立ち位置を主張するものとして、一定の意義を持つだろう。柳田の「山人-常民」、「自由民権」の「民」と相俟って、これらの民衆像が内包する<ナショナル/反ナショナル>の自己矛盾的な両義性の解明は、ナショナリズム研究の一助となるはずである。

研究成果の概要（英文）： I examined the literary genre of "travel and journey" in the 30s of Meiji period, focusing on elucidating the concept of the "picturesque homeland," which underpins the idea of the "sublime nation." The results significantly deviated from my initial expectations. Starting with Knikida Doppo's concept of the "common folk" ("Sho-min") and concluding with Yanagita Kunio's study of the "mountain people" ("San-jin"), a series of analyses revealed a different picture. These works highlight the emergence of the "people" as an absolute "other," disrupting and breaking through the picturesque scenery.

In my primary analysis, focusing on "Broken Commandment" ("Hakai") by Shimazaki Tohson, which depicts the "Eta" (an outcast group), I discussed the structure wherein the choice of "exile" from society, mediated by the "contemplation" brought by the re-acceptance of Wordsworth through Ruskin, signifies a break from the political dynamics of the "sublime/picturesque."

研究分野：日本近代文学

キーワード：ピクチャレスク 島崎藤村 国木田独歩 柳田国男 田山花袋 サブライム ウィリアム・ワーズワス
ジョン・ラスキン

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明治期のナショナリズムをめぐって、国家体制に対する言わば<反動>として、国家と対峙しながら相補する役割を果たしたロマン主義的ナショナリズムの研究史に一石を投じたのが、柄谷行人の画期的な著書『日本近代文学の起源』(1980)である。ここで柄谷は、近代的<風景>なるものが実は政治的人間 敗北を喫した政治青年たちが一転、その拠り所を現実社会から自己の内的世界へ転じた<転倒的眼差し>によって見出された<内的風景>であることを明快に論じ、ナショナリズムをめぐる文学と政治の接点 政治的ロマン主義の所在を見事に説き明かしている。ところが、その後もナショナリズム研究は政治と文学の2つの研究領域に分断されたままであり、本研究はその架橋を試みたものである。

端緒となる拙著『<崇高>と<帝国>の明治 夏目漱石論の射程』(2013)では、志賀重昂の『日本風景論』(1894)を<文学的著述>としてテキスト分析し、その反国家主義的ロマンティズムの血脈を、北村透谷を接続点に国木田独歩から伊藤佐千夫、島崎藤村へ続く自然主義文学の系譜に見出し、一方、批判的な類縁者として夏目漱石を位置づけた。志賀が提起した「吾が郷土」がラスキン著『近代画家論』(1843~60)の「sublime」の審美感を「跌宕」なる訳語を以て特権化することで、形式上は「優美(beautiful)」な霊峰「富士」に<国家>を表象させながら、実質的には「火山」群の「突兀」「偏奇」な「不規律」の<奇想>を日本固有のsublimeな美観として主張したものであることを論証した。

続いて、「感性のナショナリズムとしての山岳風景論 明治文学を視座として」(挑戦的研究・萌芽、2018-19)では、『日本風景論』に端を発し、小島烏水の「日本山岳会」創設(1905)でひとつの完成を見る<吾が郷土>の生成にあって、田山花袋を中心とする紀行文学の隆盛、大下藤次郎ら<旅する水彩画家>たちの活躍が裾野を広げる役割を果たしたことを解明した。

なかでも、これらの動向の中で傑出した存在として浮上してくるのが、島崎藤村と夏目漱石であった。藤村『破戒』(1906)を、このムーブメントの精華として位置づけ、「珍しき民」たちの「ローカルカラア」を有する「数奇」な「運命」に「大和民族」の「特色」を見出そうとする発想(烏水『破戒』を読む)が、国木田独歩の<山林海浜の小民>、柳田国男の<山人/常民>と深く通底し、<国家と国民>の創出に關する文化圏を形成していたのではないかという見取り図を得た。一方、漱石『虞美人草』(1907)を、<西欧近代 象徴としての博覧会 文明の淑女・藤尾の恋>というナショナルなものの連環を「picturesque」 絵様美(一幅の絵画のような美しさ)で表象し、さらには、その破綻を「sublime」(荘厳美)を以て顕彰することで修復しようとする主人公の男性中心主義を告発した作品として読み解き、『草枕』(1906)以来、首尾一貫した、ピクチャレスクの美学に魅せられながらも、批判的な立場に立とうとする漱石のスタンスを解明した(「漱石のジェンダー・『虞美人草』に寄せて」、『国文論叢』第55号、2020、16~35頁)。

2. 研究の目的

本研究は近代日本の黎明期 明治時代におけるナショナリズムの確立をめぐって、すでに社会科学が研究成果を挙げている制度としての<国家>の文脈と対立、拮抗しながら、実は相補的に展開されてゆく<吾が郷土>を拠り所としたロマン主義的反動を、<感性のナショナリズム>として束ね直し、その相貌を解明することを目指したものである。

具体的には、『日本風景論』が「跌宕」(sublime)をキーコンセプトに立ち上げた<崇高な国土>の下に、下位概念としての美意識「picturesque」を触媒として小説や絵画の風景美が輻輳しながら<吾が郷土>を表象してゆく構造を追究する。「穢多」に取材した島崎藤村の名作『破戒』を1つの頂点に、田山花袋が提唱する<ローカル・カラー>、国木田独歩の<山林海浜の小民>、柳田国男の<山人/常民>等の同時代言説に着目し、ナショナリズムと反ナショナリズムの葛藤がひとつの文化圏を形成し、逆説的に<国土と国民>の創出へと繋がってゆくプロセスを検証する。また補助線としては、これら所謂「自然主義」陣営と、彼らとは対蹠的な立場に立つ夏目漱石が、共通して親炙したワーズワス、ひいては上質なワーズワス論としても名高いラスキン『近代画家論』とピクチャレスク美学の相互連関を活用する。

3. 研究の方法

西欧近代において、「sublime/picturesque」の審美感がもたらした<自然>への関心、<風景美>への開眼が<郷土愛>、ひいては国民国家の国家アイデンティティの形成に寄与する役割を果たしたことは周知の事実であるが、これら西欧的美意識のフィルターを通して、日本の近代に<国土と国民>はどのようにして立ち上げられてゆくのかを以下の3つの論点から考察した。

(1) <旅と紀行>の文学圏 柳田・独歩・花袋・藤村

上記文学者たちの深い交遊関係は有名であるが、それは私的交際にとどまらず、<旅>の体験 風土や民情をめぐる互いの報告が互いを触発し合って、所謂<紀行文学>の隆盛期を作り出してゆく。全国津々浦々に足を運び、「紀行文の名手」として名を馳せてゆく花袋関係の文献調査、及び、これまであまり着目されてこなかった『文学界』時代の創作上の相互交流の洗い直しを図ることによって、<民>の原像ともいべきものが立ち上がってくる様相を考察する。

(2) <廢墟>の美学の批評性 藤村・漱石・荷風

「廢墟」趣味 <荒廢する庭>への愛着はピクチャレスク美学の特徴の1つだが、<時のう

つろい>が掻き立てる、日常の軛から解き放たれた死と背中合わせの<甘美な憂鬱>は、現実に対する深い批評性を培う土壌ともなる。「廃墟」の文献学的考察と個々のテキスト分析を行う。

(3)ジェンダーとしての<男性>の生成と成熟 『女学雑誌』から『文学界』へ

ピクチャレスク美学が男性を主な担い手とする、きわめて男性中心的な感受性であることは、漱石の『草枕』『虞美人草』が批評的眼差しの下に照らし出す通りである。明治女学校および『女学雑誌』から『文学界』まで、上記の青年作家たちのジェンダー意識をテキストから分析する。

4. 研究成果

以下、(1)(2)はシンポジウム報告「交叉と分岐としとしての「蓮華寺」 透谷、ラスキン、柳田(島崎藤村学会第42回全国大会、2023.9.23) (4)は拙稿「異性愛への違和 『桜の実の熟する時』『春』をめぐって」(『島崎藤村研究』第50号、2023.12、48~59頁)及び、公開講座講演「島崎藤村と『女学雑誌』」(藤村文学連続講座、2023.11.18)に基づく成果である。

(1)<ただの風景>と<名も無い民>の発見 交遊圏の成果と終息

まず、所期の目的通り、交遊圏を検証することによって、国木田独歩の「小民」に始まる、鄙びた地方の名も無き「民」にする関心が、田山花袋の諸作はもとより、島崎藤村『破戒』の「穢多」、柳田国男の「山人」まで、明治30年代から40年代初頭へかけて<「民」の系譜>とも呼ぶべき1つの水脈を形成していることを明らかにすることができた。

これまでも彼らの交流が議論されなかったわけではない。但し、関心の主眼は個別の人間どうしの際際の方に置かれ、間テクスト的な研究には乏しい。『蒲団』(1907~08)を契機とする言論的立場上の決裂を経ながらも生涯にわたって交流が結ばれた「柳田 花袋」間の関係が特権化され、このような文脈で捉えた場合の「柳田」のポジションは、初期には小説の素材提供者、後には「自然主義」文学の温床ともなった「土曜会」「龍土会」の主宰者に限定される。ところが、彼らの多くが集うた『文学界』第3期に照準を合わせれば、むしろ柳田の典雅で繊細な紀行的エッセイ「利根川の夜船」(1896.2)が触媒となって、花袋、藤村はもとより、戸川秋骨までを巻き込んだ、<利根川>を主題とする競作状態が巻き起こっている。以降も、柳田の有名な伊良湖岬逗留は柳田自身の「伊勢の海」(1902)へ結実する一方で、花袋「伊良湖半島」(1899)を産み、藤村の『破戒』執筆に伴走するようにして花袋「雪の信濃」(1904)が執筆されている。彼らの交遊圏は、即、実作者としての柳田を触媒とした<旅と紀行> 明治30年代から40年代を席捲する文学ジャンルの揺籃の場であったと言える。とりわけ、藤村の「利根川だより」(1898)は、汽船に乗り合わせた女客たちのさんざめきや苦役に喘ぐ運転手のリアルな姿を生動するようなタッチで描き出したものであり、「自然主義」文学の誕生と相俟って大きな議論となる<描写>の良質な先取りを示す水準に達している。

そして、上記のように、この交遊圏に<旅と紀行>をめぐって脈々と受け継がれてゆく文学的系譜を見出す時、予想外の収穫として見えてくるのが、「民」の原像 国土を侵犯してゆくピクチャレスクの圏域を突き破るようにして現れ出てくる「民」の姿であり、換言するならば<ナショナル>なもののへ回収されることに対する違和と抗いの表明である。

現在、明治30年代文学をめぐる研究は、むしろポストコロニアル的視点のもとに、地方が中央へ編成され、民衆が国民へ統合されてゆく仕組みを解明するところに大きな達成を見せている。「柳田 花袋」に「民俗学的眼差し <自然>の再発見」を重ね合わせることで、たとえば花袋の『重右衛門の最後』(1902)の<自然>は、西欧的近代化のもとで疲弊を覚える都会人がその疎外感を周縁化された地方の民衆に投影することで見出された自然 失われてしまった、にも拘わらず、本来は存在していたはずの<自然>の<捏造>として読むことができる。藤森清注^注、深津謙一郎^注が的確に指摘するように、このようにして見出された<地方>とは、<東京>在住の作家たちの観念の中で転倒的に見出された抽象的でイマジナルな空間にすぎず、実際にモデルとなった地域の具体的な固有性は消し去られている。

ところが、ここに補助線として国木田独歩を配置してみた時、そのような植民地主義的眼差しとは一線を画した民々の姿が見えてくる。実は独歩の短篇『忘れえぬ人々』(1898)こそ、まさに柄谷が<風景の発見>における<転倒>の典型として名指した作品である。しかし、注意しなければならないのは、主人公の「大津」が提示する3つのピクチャレスクな「風景」では、所謂「小民」たちは風景の中に点描されるに留まり、一人の人間としての像を結ばない。短篇ラストに「忘れえぬ人」として新たに書き加えられる、この夜「大津」の泊まった「亀屋」の「主人」が人格的輪郭を伴うのとは様相を異にする。風光は明媚ながら、そこに生きる周縁化された「民」は「大津」には接近不可能な、描写を拒む厳然たる<他者>として現れている。また、そうであるが故に、疎外された者同士としての共感をどうしても手にしたい「大津」であるが、彼に唯一許されるのは、功名心に捉われた「主我の角」が「ぼきり折れ(た)」瞑想状態の中で「光景の裡に立つ」「此等の人々」に「我れと他と何の相違があるか」「相携へて無窮の天に帰る者」といった一体感を味わうこと つまりは自分自身が風景の中へ溶解を遂げてゆくような<死>にも等しい融解体験のみである。独歩と「小民」を切断する絶対的差異は、短篇『源叔父』(1897)において、より強烈に示されている。「都」に住む「年若き教師」は、わずかに一年ほど、地方の片田舎に赴任していた折に見聞した、「源叔父」と呼ばれる渡し守のあわれな身の上に未だ心寄せている。笑わず、物言わず、人の世から遠い「源叔父」に「何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱」のような魅力を感じる「若き教師」は、まさに東京に居ながらにして、「旅人の情」を以て無名の一船頭に「想高き詩」を読むがごとき恣な空想を馳せ続ける。ところが『源叔父』は、「教師」

の離任後、彼の与り知らぬところで生じた出来事として、「源叔父」が乞食の孤児「紀州」を引き取って甦ったように元気を取り戻しながら、「紀州」の出奔に絶望して縊死する経緯を詳細に書き記す。「上」で展開される「若き教師」の転倒的な「源叔父」像は、ラストの「教師の詩はその最後の一節を欠きたり」の一言を以て封じられ、「中」「下」で「源叔父」が遭遇する苛酷な現実とは、「上」の「教師」の空想との亀裂を剥き出しにしたまま、全く別個に叙述される。

独歩の短篇小説群は、一方で藤森、深津が見事に指摘した<東京>が<地方>に向ける植民地主義的眼差しを描きながら、同時にそれを徹底的に撃ち返す、安易な同情や共感を許さない絶対的な<他者>としての「小民」像を提示している。そしてここまでの文脈に立つならば、『源叔父』で投げ出されるように示された一人の「小民」をめぐる逸話は、柳田国男が『遠野物語』(1910)で断章の形式で提示する聞き書きの一つひとつ 不思議な伝承や素朴な出来事に相当するものであることが見て取れる。「源叔父」が辿る苛酷な運命は、『山の人生』(1926)の冒頭で「山に埋もれたる人生」の1つとして紹介される、あまりに有名な炭焼きの男の一家心中事件 貧窮を察して父に死を乞うた二人の子供と、自分だけ生き残ってしまった男の悲劇のほとんど前駆的な姿を示しているといえるだろう。

柳田が短編集『武蔵野』(1901)を絶賛した話は有名で(徳富蘆花『富士』) またみずから独歩を土曜会の「陰の黒幕」と評している(「自然主義小説のころ」)が、独歩の「小民」を始原に位置付け、その終幕に柳田の「山人」を置いた時、<旅と紀行>の交遊圏からは、柳田自身の言を借りるならば「いくら同国人」でも「外から来た」者には「知ることが困難であり、之を理解することは殆ど絶望的」(「郷土研究と郷土教育」)な<他者>としての<民>を、いかに損なうことなく、可能な限り正確に記し留めるかという<描写>をめぐる苦闘の表現史が見えてくる。そして『重右衛門の最後』と『破戒』はその2つの極を示す記念碑的作品として位置づけられる。

『重右衛門の最後』は、やはり柳田が高く評価した作品だが(「田山花袋の作品」) 実はその構造は『源叔父』と瓜二つ、「自分」が「手帳の画」さながらの美しい風景を期待し、実際にその「眺望」を手にする前半「第5章」までと、「獣(けだもの)」のような重右衛門の放火から死に至る顛末を見聞する後半と 2つの<自然>に分裂している。重右衛門を中心に村で展開されるおぞましい「人生の巴渦」は、「自分」が期待していた「静かな村」の「美しい自然」を真っ向から裏切るものであり、小説の主題は、その一見「不自然」に見える悲惨な<村の現実>に内包された真の<自然>に「意味」を発見することへと収斂されてゆく。したがって藤森も指摘しているように、重右衛門を取り巻く「自然」そのものには、もはや「荘厳」さ(sublime)は片鱗もない。剥き出しになるのは、村落共同体内における<重右衛門 vs. 村人たち>の激しいぶつかり合いであり、深津も指摘するように、己が「性能」の欲するままに暴力を振るい続ける「自然児」重右衛門の「自然の発展」と、リンチによる殺害を決断せざるをえなかった村人たちの「心底から露骨にあらはれた自然の発展」 2つの<自然> どちらの人為的介入の余地のない相克である。ここに見出せるのは、ピクチャレスク美学の完全な放棄と、立ち入ることを許さない<他者>が内包する生々しい<自然>のおのずからな出現である。それはまた、柳田の世界がピクチャレスクの圏域を踏み破って露出した姿であるとも言えるだろう。

一方、『破戒』は藤村と等身大の主人公の「丑松」その人を「穢多」に設定する。「千曲河畔の物語」(「序」)を標榜し、信濃に生きる民とその性情を描いた短篇連作集『緑葉集』(1907)から一大転換を図って、藤村が一度きり選び取った、みずからを<‘民’を生きる>立場へ降り立たせた作品である。社会の圧力との孤独な死闘に「持つて生れた自然の性質」の「銷滅」を覚える「丑松」は、社会のタブーを犯して「穢多」の身分を「告白」し、社会に対してみずからを周縁化することで、かつがつ「自由」と「蘇生」を手にする。社会は「穢多」であることを明らかにすれば「放逐」を以て対処し、秘匿し続ければその末端に連なることを黙止する。「丑松」の亡き父は、息子の立身出世を唯一の望みに自分の一生を山間に埋もれさせた挙句に、壮烈な死を遂げる。その裏返しとして、いま一人の<父>たる「蓮太郎」は、「穢多」の出自を公にして社会に対する悲壮な戦いを挑んで落命する。遠景に描かれるのは貧しく厳しい農村生活の毎日を営々と生きる農民たちの生活風景である。はるかアルプスの連山をバックに、穏やかな小都会と美しい田園風景を展開する『破戒』の空間とは、「sublime/picturesque」の美学が確実に機能して、国家規模で進行しつつある地方と民衆をめぐる整然たる階層化を隠蔽しながら下支えする、きわめて政治的な空間であったといえる。みずから「放逐」されることを選択し、社会から離反することで最も純粋な<私>の<自然>を守ろうとした「丑松」の拒否したものこそ、「sublime/picturesque」の政治的力学圏だったと結論することができる。

独歩を始発に、花袋、藤村を包摂しながら初期・柳田へ帰結する<旅と紀行>の交遊圏は、時代を席捲したピクチャレスクの美学に深く魅せられながらも、その圏域を脱して、均質的な<国民>へは回収不能な個別の‘民’の具体へと迫ってゆく。「経世済民」を固守した柳田国男の反産業革命的な批評的眼差しのもと、主には「小説」という虚構ではあるものの、所詮は<内側>からしか捉えることのできない他者の現実、細部の描写を積み重ねることで迫ろうとした手法は、柄谷が柳田民俗学を評して名付けた「記述的<生活誌>」^注 とでも呼ぶべきものに近い。

(2) 『破戒』における<ピクチャレスク美学>の昇華と訣別 J. Morley を媒介に

廢墟の瞑想 <死と再生>の空間としての<荒廢の「蓮華寺」>
東北学院の教諭を務めた仙台時代に、藤村がラスキンに加えてジョン・モーレーの「序文」付き

でワーズワス詩集を改めて受容し直したことは、すでに八木功が詳細に論じている(『島崎藤村と英語』、2003)。ここで八木が焦点化したのは、藤村の小諸時代のキーワードにもなる「簡素な生活」であるが、さらにモーレー「序文」は、ワーズワスの「簡素な生活」(simplification of life and thought)の核心を「感情の簡素化」に不可欠な「瞑想」(contemplation)に求めていることを指摘できる。とりわけモーレーがJ.S.ミルのワーズワス観として『自伝』から引用している「静謐な瞑想の中の幸福」(happiness in tranquil contemplation)は、詩集『抒情歌謡集』第2版(1800)にワーズワス自身が寄せた「序文」の‘contemplation’の作用を論じた‘Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity.’以下のくだりとダイレクトに繋がる。この一節を意識した「詩歌は静なるところにて想ひ起したる情緒なり」(蒲原有明宛て書簡、1902.1.8。合本『藤村詩集』「序」(1904.9)では「情緒」は「感動」)は、『破戒』を構想した頃の藤村の愛唱句である。

<瞑想>を<眺め入る><深い思に沈む>等の頻出語句と相俟って『破戒』のキーコンセプトと捉えた時、ピクチャレスク美学の<廃墟美>を連想させる「蓮華寺」の僧堂に「寂寞の瞑想」を展開する第15章が、ラストの<死と再生>のドラマの離型ともなってテキストの重要な結節点を形成していることに気づかれる。過去に誇った栄光と現在の零落、頽廢のコントラストが見せつける壮大な‘時の力’を前にした、今にも呑み込まれてしまいそうな寂滅の感は、同時に人を日常の軛から解き放ち、最も自分らしい自分と出逢わせる。死にも近接した深い瞑想に陥った「丑松」の中で、まさにワーズワスが論じたように、様々に湧き上がってくる思い乱れる感情はしだいに哀感を伴った人懐かしさへ昇華されてゆき、その先に像を結ぶのが、同じく不幸な境涯を忍んで生きる「志保」である。「持つて生れた自然の性質」への覚醒はここに用意されている。

「蓮華寺」の設定がワーズワスの有名な「ティンタン僧院」(“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey”1798)の影響下にあることは確かだが、「ピクチャレスクな眼」が瞑想、観照へと深められ「内観」風景の精神化に達することを謳ったこの詩は、文学史的にもピクチャレスク美学の終焉とロマン派の開花を告げるものとみなされている。

パイロンからワーズワスへ J. Morley, “Introduction” が示唆するもう1つの文脈
モーレーはワーズワスの謳う日常に親和的な自然とそれに必要な瞑想を強調するために、ことさらにパイロンのロマン的反動性、激情を対比している。ワーズワスを「静かなる崇高」(‘natural sublime’ -M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山』)と規定するならば、パイロンはピクチャレスク的であり、実はこの対照、およびパイロンからワーズワスへの傾斜はラスキン『近代画家論』が描く筋道でもある。『破戒』の「丑松/蓮太郎」は明らかに「ワーズワス/パイロン」をスライドさせたものであり、やがては藤村自身が「藤村/透谷」の差異化のための参照枠に用い、平田禿木(「文学会」の回顧)を初めとする同時代言説へ広まってゆく。それが「蓮太郎」の場合に同じく、「狂(人)」を以て透谷の表徴とする歪んだ言説を招来したことは否定できないものの、むしろ「間テキスト」的に、藤村における透谷の「影響の不安」(ハロルド・ブルーム『影響の不安』)畏敬する透谷の圧倒的な影響力を免れるための卑下や自己削減を見るべきである。

国木田独歩入手の“The Complete Poetical Works of William Wordsworth”の発行年に関する訂正
研究の副産物として、独歩入手のモーレー版が、塩田良平の指摘(「国木田独歩に及ぼしたワーズワスの影響」、『明治大正文学研究』第17号、1955)、山田博光の整理(『北村透谷と国木田独歩』、1990)を経て、通説となってきたMacmillanの「1888年版」でないことが判明した。1888年版はタイトルに“with an introduction by John Morley”を付しながら、現物にはモーレーの「序」を欠くことが確認できる(所蔵は大阪府立中央図書館、国立国会図書館。確認は前者)。管見では、実際にモーレーの「序」が挿入されているのは同書の「1889年版」(ハーバード大学図書館蔵)である。

(3)文明批評の拠点としての廃墟の詩学 永井荷風『日和下駄』(1915)

『日和下駄』のキーワードの1つともいえるべき「絵画的詩興」は、彼の愛好したアンリ・ド・レニエ(1864~1936)を経由した「廃墟のロベール」の異名を持つユベール・ロベール(1733~1808)の風景画の影響を受けたものであると考えられる。近代化から取り残された荒廃する風景にみずからの滅びの意識を重ね合わせた「荒廃の詩情」に、喧噪に満ちた近代都市、東京に対する辛辣な批評の立脚点を見出すことができる。

(4)藤村テキストの中のジェンダー

生々しい性的欲望を描いたことで知られる藤村であるが、獣欲にも等しい肉体的欲望が西欧伝来の甘美な「love」と一体化する「異性愛体制」への違和と疑義にこそ藤村の本領を指摘できる。『春』(1908)は異性愛と表裏する男性間のホモソーシャルに対する拒否感、異性間の親密な信頼関係への憧憬を内包する。藤村、透谷ら『文学界』同人たちのハムレット熱の中核は「オフエリヤの歌」にあり、恋愛感の出発に女性への仮装 ジェンダーのねじれを見出すことができる。

【おもな参考文献・引用文献】

注 藤森清「明治35年・ツーリズムの想像力」、『メディア・表象・イデオロギー』、1997

注 深津謙一郎『重右衛門の最後』、『日本文学』第48巻9号、1999

注 柄谷行人『柳田国男論』、2013、20頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森本隆子	4. 巻 50
2. 論文標題 異性愛への違和 『桜の実の熟する時』、『春』をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 島崎藤村研究	6. 最初と最後の頁 48～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森本隆子
2. 発表標題 交叉と分岐としての〈蓮永寺〉 透谷、ラスキン、柳田
3. 学会等名 島崎藤村学会第50回全国大会（2023年度）（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>学術貢献として、以下の講演を行った。 「島崎藤村と『女学雑誌』」（藤村文学講座第8回、於 小諸ステラホール、2023・11・18）</p>
--

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------